

職人技 守りだけじゃない



奈良県内で最も面積が小さい町(4.06平方キロ)で、人口6975人(1日現在)の三宅町は、グラブ生産地として知られる同県の中心的な役割を担う。町史などによると、日本のグラブ作りは、大阪市で創業した美津濃商店(現ミズノ)が、同町出身の職人、坂下徳治郎さんに依頼したのがきっかけとされる。坂下さんは1921年、地元の職人らと製作を始めた。

やがて熟練の技術者も育ち、地場産業として発展した。戦後の野球ブームにも乗り、米国への輸出も飛躍的に伸びた。「(最寄りの)但馬駅で朝、満杯の電車から職人らが降り、電車はほぼ空になった。駅に着いたら革のにおいがしたらしい(雅彦さん)というほどの活況を呈した。

しかし、71年、金とドルの交換を停止した「ニクソン・ショック」により、1万3600円の固定相場制から変動相場制に移行され、輸出産業が大打撃を受けた。さらに低賃金の労働者を多く抱える韓国、台湾など

の業者が生産に力を入れ、国内スポーツ用品メーカーも海外へ拠点を移すようになった。国内の業者への影響は大きく、奈良県の生産量も79年の215万個から、90年には105万個まで半減した。

「手と一体」へ進化続く

近年は少子化の影響などで球児の数が減少傾向にある。後継者不足もあり、100社を超えた三宅町の業者は現在、約20社まで減ったという。その中で、新たな道を模索する職人も少なくない。約5年前から本格的にオリジナルブランドの販売を始めた「JUNKEI-GLOVE」の3代目、吉田貴夫さん(43)もその一人だ。

グラブは納入先のスポーツ用品メーカーのブランドで販売されるのが一般的。しかし、吉田さんは「ユーザー目線の本物を作りたい」として、「J」と「G」を組み合わせたロゴを冠した自社ブランドの商品化

に踏み切った。価格を抑えようと、問屋を通さず、各地のスポーツ用品店に自ら営業をかけた。現在、全国約60店舗で扱ってもらえるようになった。

こだわりの一つが、グラブ内部の縫製に使う糸。硬い糸を用いるとグラブの耐久力は増すが、硬くなって捕球しにくくなる。試行錯誤の末、防弾チョッキにも使われる丈夫なアラミド繊維にたどり着き、その製法で特許を取得した。

革質にもこだわる。1枚の革から5個程度のグラブを作るのが一般的だが、「3個取れたらいい。1個分しか取らないこともある」と一切妥協しない。

この道に進んで約20年。「世の中がどんどん進化して、昨日100点のモノも、明日は90点かもしれない。自分が進化しないと置いていかれる。海外が追い付けないことをしないと、強みがなくなる」との信念を持ち続けた。はめた瞬間、手と一体になる。そんなグラブが理想だ。